

山 鳩

小沼 丹

河出書房新社

目次

柚子の花

臨時列車

沙羅の花

鶴 鴿

凌霄花

セ

三

五

八

三

粉雪

二三

風

二六

坂の途中の店

二九

山鳩

三五

初出誌一覽

山鳩

小沼丹短篇集

柚子の花

庭の一隅に柚子の木があつて、五月中旬頃になると小さな白い花が咲く。或る友人がゐて、自転車に乗廻してゐたら、一軒の農家の庭に柚子の木を見掛けた。実が沢山附いてゐてなかなかいい。欲しくなつて、譲つて呉れと交渉したが先方は承知しない。それを無理に譲つて貰つたが、当人は団地に住んでゐるから庭が無い。

——お宅の庭に植ゑて下さい。

さう云つて運んで来たから、飲んで貰つた。三米ばかりの木で、花も咲くが無論実も生る。冬枯の庭に、柚子の黄色の実を見るのは悪くない。木のためには実を採つた方がいいのだらうが、実を見る愉しみが無くなるから附けた儘にして置く。附けた儘にして置くと、実は水気が失せてすかすかになつたり、鴨が啄んで穴を明け

たりするが、そんなことには余り拘泥しない。

実を見るのもいいが、ぼんやりしてゐると、微風に乗つて柚子の花の香が流れて来ると云ふのも悪くない。どう云ふものか、柚子の花の香を嗅ぐと昔のことを想ひ出す。五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする、と云ふ古い歌がある。その歌にある花橘の香は知らないが、どうやら柑橘類の花には追憶を誘ふ香があるのかもしれない。

いつだつたか、柚子の花の香のする風に吹かれてゐたら、ひよつこり、忘れてゐた一人の娘さんを想ひ出した。或は、その女性と親しかつた内山から電話が掛つて来た后だつたかもしれない。想ひ出したら、不意にこつこつと足音が聞えて、聞えたと思つたら忽ち消えてしまつた。

昔のことだが、齡下の友人の内山に、都心の一軒の酒場に連れて行かれたことがある。かなり広い明るい酒場で、その椅子に内山と対ひ合つて坐つたら、何だか

ホテルかどこかのロビーにでもゐるやうな気がした。内山の話に依ると、夕方から酒場らしくなるが、昼間は珈琲や茶を喫んで、仕事の打合せに利用する人も多いと云ふから、純然たる酒場とは違ふのかもしれない。

時間の関係かどうか、ちやうど他に客がゐなかつたせゐだらう、眼の大きな若い女が傍に来て坐つた。内山は顔馴染らしく、

——この人は、のんこ、と云ひます。

と教へて呉れた。本名も聞いたが忘れたから、茲では仮に暢子として置く。「のんこ」には、確か鉄面皮とか道楽者と云ふ意味があつたと想ひ出して、さう云つたら、

——あら、厭だ、ほんとですか？

その若い女は可笑しさうに笑つた。愛嬌のある顔をした娘さんで、内山が下らない謎謎の問題を出したら、首を傾げて本気で考へたりしてゐて、その恰好はちよつと可愛らしかった。

その裡に客が何組か来て、暢子も立つて行つたから、内山と酒を飲みながら莫迦話をしてゐたら、暢子が戻つて来て、胸の所から疊んだ紙を取出すと内山に渡した。

——これ、何て書いてあるんですか？

と訊いてゐる。内山はその紙を開いて見ると、

——これは、そちらに伺つた方がいい……。

と苦笑しながら此方へ差出した。何かと思つて見たら英文の手紙で、莫迦に読み難い字が書いてある。苦労して尠し読み掛けたら、恋文らしいから変な気がした。大体、他人の恋文なんて読んでもつまらない。黙つて暢子に返したら、暢子も黙つて、また胸のなかに蔵ひ込んでしまつた。

——何だい、その手紙？

と訊いたら、

——だつて、判らないんですもの……。

と笑つてゐる。その顔を見たら、女はその手紙の内容を承知してゐて、その上で内山に見せようとした、何だかそんな気がした。気が附いたらレコオドで、「伊太利の庭」とか「ポエマ」とか「小さな喫茶店」とか、懐しいタンゴをやつてゐたから好い気分になつて、手紙のことは直ぐ忘れてしまつたかもしれない。

向うの方に女連の三、四人の客がゐて、その卓子の上に銀色の紅茶のポットが載つてゐた。女性用だらうと思つてゐたら、暢子が男性の一人が紅茶を喫んでゐると云つたから、おやおや、と思つたがそれはどつちでも構はない。古いタンゴを耳にして昔の銀座を想ひ出してゐたら、その銀色のポットが眼に入つて、昔の或る店を想ひ出した。

天金横町だつたか、その次の横町だつたかはつきりしないが、「ラスキン」と云ふ店が開店したことがある。ラスキンに心酔してゐた御木本真珠王の御曹子が開いた店で、まだ学生の頃だが、友人と面白半分に這入つてみたことがある。喫茶店に這入るぐらゐのつもりだつたと思ふが、先方はもつと高尚な理想を掲げてゐたかも

しれない。

店の造作など悉皆忘れてゐるが、恐らく、英国風だつたのではないかしらん？

——茲ぢや、紅茶の方が良ささうだぜ。

と紅茶を注文したら、白い服を着た給仕が恭しく、大きな盆の上に銀色のポットや砂糖入を載せて運んで来たから面喰つた。ちやうど、瘦せて眼鏡を掛けた御曹子が店にゐて、氣になるやうにあちこち見廻して、給仕に何か注意したりしてゐた。

——あれがラスキンだよ。

真珠王の息子は前に或る所で見て知つてゐたから友人に教へたら、友人は御曹子を見て、

——ふうん、道楽でこんな店が出せるなんて、いい身分だな……。

と羨しさうな顔をしたのを想ひ出す。どうも学生の行く所ではないやうな氣がして、その後は敬遠して行かなかつたが、「ラスキン」も経営は捗捗しくなかつたと見える。間も無く店を閉めてしまつた。友人は「いい身分」と云つたが、實際は寧

ろ悪い身分だつたらしいと云ふことは、店が潰れてから知つたのである。

そんなことを想ひ出して、或は内山に話したかもしれない。それからその酒場を出て、内山と知つてゐる店を二軒ばかり廻つて、新宿に行くことにした。車を拾はうと思つたら内山が、此方です、此方です、と云ふからふらふら随いて行つた。何でも三月初だつたと思ふが、寒い風の吹く暗い往来を歩いて行くと、不意に暢子が現れて、陽気な声で、

——今晚は……。

と云つたから吃驚した。

——こんな所で何してゐるんだい？

——いま帰る所なんです。

——ああ、さうか。よく会つたもんだな……。

と云つたら、内山が、

——なあに、茲は先刻の酒場の前の通ですよ。